様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９ＫＫ０００３

研究課題名（和文）子育ての現象学：フィンランド・ネウボラをフィールドに

研究課題名（英文）Phenomenological Research of Child Care: Taking a field of Neuvola in Finland

研究代表者
浜渦　辰二（Hamauzu, Shinji）

上智大学・グリーフケア研究所・教授

研究者番号：７０２１８５２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の現象学研究者がフィンランドの現象学研究者とともにフィンランドのネウボラ（出産・子育て支援センター）のフィールド調査を行い、子育て(child care)の哲学的問題を国際共同研究として現象学的に考察することを目指した。ところが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により渡航・調査を断念せざるをえない状況が続き、やむなく研究期間を１年間延長した。最終年度内に渡航することに最後の望みを賭けつつ、共同研究の比重を文献調査へと移し、論文集『子育ての現象学』の発行を目指した。2023年3月中旬に最後のチャンスと渡航・調査を決行し、4月28日発行の同書にその調査報告も収録することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果は、福祉や保健の問題として第三者的視点から論じられることが多い子育ての問題を当事者の視点から現象学的に考察することで、これまで見逃されていた事象を明らかにするという学術的意味をもっている。それはひいては、現代日本社会において細かい制度や財政の問題として論じられがちな子育て支援のもつ哲学的問題を明らかにすることに貢献することなる。百年に一度の世界的パンデミックのなか、本研究は当初の計画通りには進まず予定変更をせざるを得なかったが、小規模なものとなったもののフィールド調査もすることができ、論文集を研究報告書として編むことができ、将来へ続くための足がかりとなるものを残すことができた。

研究成果の概要（英文）：This project was intended to phenomenologically investigate the philosophical problems of child care based on field work at Neuvola (support center of delivery and child care) in Finland with Finnish phenomenologists. However, due to the pandemic of Covid-19 we were continually forced to abandon our flight and field work, so we could not help extending our research period. Hoping to visit within the last year, we shifted the weight on literature research and aimed to publish the collected papers “Phenomenology of Child Care”. In the middle of March 2023 we finally carried out the research trip and included its report in the papers published online 28. April.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：現象学　子育て　フィンランド　ネウボラ　傷つきやすさ　父親と母親　祖父母

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

筆者たちは、これまで北欧の現象学者との共同研究において、「人間の傷つきやすさと有限性」を主題に据え、誕生、老い、病い、死、障がい、痛み、性・ジェンダー、人種・差別といった具体的な問題を現象学的観点から検討してきた。その結果、こうした検討の妥当性を検証し、その応用可能性を吟味するために、統一的な主題を設定し、特定のフィールドで調査・分析する必要性がでてきた。そのため、本研究では北欧の現象学者との共通のフィールドとしてフィンランドの先進的な子育て支援施設ネウボラを定め、「子育て」についての現象学的な検討を行う。子育てに注目することで、親子関係、子の障がい、育児と老いの関係などを具体的に考察し、「人間の傷つきやすさ」の社会実装のあり方を検討することが可能となる。また、子育ての経験およびそれらと密接に関わる問題との連関を現象学的に解明し、少子化、子どもの虐待、超高齢社会といった現代社会の諸問題にも寄与することを目指す。

こうした背景のもと、本研究は、長年にわたって共同研究を行なってきた Sara Heinämaa のアドバイスを得ながら、Irina Poleshchuk と Erika Ruonakoski（後に、Valerie Oved Giovanini と交代）を共同研究者として、フィンランドの子育て支援施設ネウボラをフィールドにし、子育ての現象学的研究を試みる。老いや死についての現象学はこれまで数多くの蓄積があるが、誕生や子育てについての現象学的研究は芽生え始めたばかりである（『思想』「特集：生殖／子ども」, 2019 年 5 月号）。子育ての経験に注目することで、親ないし子どもに障がいがあるケース、高齢者の育児参加、高齢者介護と育児の重複の問題などが新たに浮かび上がり、「人間の傷つきやすさと有限性の現象学」の社会実装のあり方を総体的に検討することが可能となる。

これまで、ネウボラでの支援や施設の運営方法については、フィンランドや日本でも福祉政策や教育学をはじめとする様々な分野で研究が進められてきた（髙橋睦子『ネウボラ―フィンランドの出産・子育て支援』, 2015; 横山美江・Hakulinen Tuovi 編『フィンランドのネウボラから学ぶ母子保健のメソッド』2018 など）。しかし、ネウボラが子育て支援にとどまらず、いかなる価値観や家族観を形成しているか、そこでなされる妊婦やパートナーへの支援が当事者たちにとっていかなる意味をもつのかについては、フィンランド国内においてもそこまで研究が進められていない。本研究は、医療やケアの従事者とも連携して調査を進めているフィンランドの現象学研究者たちの力も借りて、現地での継続的な調査を行うことで、ネウボラの支援やそこで育まれる人間関係によって、妊婦やパートナーの出産や子育てについてもつ見方がいかに支えられたり、変容させられたりするのかを考察する。

２．研究の目的

本研究の目的は、現象学の方法を用いて、ネウボラの支援を経て形成・再形成される親の子育て経験を当事者の視点から解明することにある。子育ての場面では、しばしば子育てをする当事者の視点が見過ごされてきた。例えば、子育てについては、様々な養育論やマニュアルが流布しているが、子どもの成育や発達を客観的な視点から解説して子育てのポイントを親に教示するものが大半であり、子育てをする親のパースペクティブが充分に尊重されているとは言い難い。ネウボラにおいては、出産前から親の経済的状況や労働環境、パートナー間の人間関係や周囲との人間関係について妊婦や父親となる男性との対話や相談が行なわれている。こうした対話を通じて、支援者が一方的に子育てについての知識を教えるのではなく、妊婦や男性パートナー自身が自分たちの置かれた環境に沿って自分たち自身の子育ての認識や知が育まれている。つまり、そこでは、それぞれの親に特殊な事情、特に親や子の障がいの有無、経済的状況や労働環境、周囲の人間関係といった傷つきやすさを孕んだ現実に沿って、各人にとって望ましい子育てのあり方を支援者と共に探求していくという「探究の共同体」が形成されている。

現象学は、経験する当事者の視点から、経験を当人が位置づけられた経験のネットワークのなかで記述し、分析する手法である。そのため、人間の傷つきやすさを生物学的な観点や社会学的な観点からではなく、私たちが生きる生活世界という場面から、祖父母をはじめとする人間関係や様々な施設や労働環境との関連を含む経験のネットワークのなかで考察するのに最も適している。当事者が自分一人（一人称パースペクティヴ）で研究するだけではなく、共に歩む人（二人称パースペクティヴ）やさまざまな分野の研究者・専門家（三人称パースペクティヴ）との対話のなかで「探求の共同体」を形成する試みも現象学の内部から生じている。このような現象学的方法を用いて、支援される当事者の視点から、ネウボラの子育て支援の真の意義に迫る点に本研究の独自性がある。

３．研究の方法

本研究では、北欧の現象学者らと共に、フィンランド（ヘルシンキとユヴェスキュラを中心に）のネウボラをフィールドとして継続的な調査を行い、現象学的な分析を進めるが、研究の方法は各人で異なり、各人の役割と調査対象および研究目標は次の通りである。

筆者は、研究全体の統括と海外共同研究者や訪問先との連絡・調整のため、毎年２週間程度の渡航を計画している。これまで北欧の高齢者施設、ホスピス、インクルシーブ教育の学校の調査などの経験と老いの現象学的研究とに基づき、子育てが親子関係の問題だけではなく、祖父母との関係、きょうだいとの関係、社会との関係などとも結びついていることを視野に入れながら、研究全体のデザインに配慮する役割を担う。特に個別研究の課題として、フィンランドでは高齢者は育児にどのように参加し、あるいは排除されるか、また高齢者介護と育児がどのように両立

されているのかに注目して調査・検討する。
　池田は、子育ての現象学の理論的解明という役割を担う。具体的には、ネウボラの実践を調査研究フィールドとして「子育ての現象学的探究」をフィンランドの研究者と進める。子育てを、誕生前の妊娠・出産から開始するものと考え、様々な社会関係のなかで経験される営みとして現象学的に分析することが目標である。そのために、１年目と２年目にフィンランドにそれぞれ一週間ほど滞在し、ネウボラの施設の調査研究および議論にあてる。同時に、子育てについての従来の哲学的・理論的見解を調査し、経験に即した現象学的分析の立場から、既存の理論を現実への符号や現実からの乖離の点で吟味する。
　中は、母子に集中した親子関係を理論的実践的両側面から再考するという役割を担う。２年目と３年目にフィンランドに一週間ほど滞在し、ネウボラでの調査により子どもとの関係における、妊娠出産を経験した母とその子の関係の生物学的側面に依拠した特権性あるいは義務を解きほどき、「第一の親」としての子の関係は性別や血縁関係を超えて広がりうるし、現に広がっている側面があることを明らかにする。その際、望まない妊娠による中絶、出生前診断にかかわる親の葛藤、新生児遺棄、虐待、養子、里親、父親中心の子育てなど、妊娠出産・子育ての典型とはされていないかたち、あるいは負の側面にも重点をおいて解明する。
　小手川はネウボラにおける「父子関係」の形成を理論的実践的両側面から解明するという役割を担う。１年目と３年目にフィンランドに二週間ほど滞在し、ネウボラにおける出産や子育てに男性パートナーがどのように係わり、どのような支援がなされているのか、またネウボラにおける支援によって男性たちの出産や子育てに対する係わりがどのように変容していくかを調査・分析する。このような調査・分析を通じて、男性たちの「父親」としての自己認知がどのように形づくられていくのか、また男性たちがたんなる生物学的な父親にとどまらず「父親」となるために、周囲のいかなる支援が必要かを現象学的な観点から考察する。
　若手研究者である川崎は、北欧の若手研究者とのネットワークづくりとネウボラにおける子育てに関連する生命倫理学の理論的枠組みを批判的に検討する役割を担う。１年目にスウェーデンの現象学的生命倫理学を主導する研究者の属する研究機関（ストックホルム大学、セーデルトーン大学等）を訪問し、現地の若手研究者とのネットワークづくりを行う。２年目と３年目にフィンランドに二週間ほど滞在、ネウボラを訪問し、そこでの子育てが従来の生命倫理学で前提されてきた個人観や家族観に対していかなる見直しを要求するものであるか、現象学的な記述に基づいて考察する。また、障がいのある子どもとその親に対する支援についても調査し、関連する生命倫理学・障害学の議論を再考する糸口を探る。

４．研究成果
　2019 年度は、12 月にネウボラの専門家である髙橋睦子教授(当時吉備国際大学、現在恵泉女学園大学、社会福祉学)をお招きして、第１回国内研究会・公開講座「ネウボラ―フィンランドの子育て家族支援」を大阪大学にて開催し、2020 年 3 月にフィンランドで予備調査をする計画を立て、調査をオーガナイズし通訳をしていただく現地の方とも打ち合わせを済ませていたが、新型コロナの世界的な蔓延の影響のなか、フィランド渡航は延期とせざるをえなかった。
　2020 年度は、新型コロナが収束に向かうことを期待しつつ、8 月にフィンランドでの本調査を行う予定であったが、新型コロナ第 2 波の影響でキャンセルせざるをえず、8 月にネウボラの専門家である横山美江教授(大阪市立大学大学院研究科、保健学)をお招きして、第２回国内研究会・公開講座「ネウボラ―フィンランドの子育て家族支援に学ぶ」をオンラインにて行い、また、12 月には国内の共同研究者・研究協力者による第 3 回国内研究会を同じくオンラインにて行ったものの、年度末の 2021 年 3 月に計画していたフィンランド渡航も延期せざるをえなくなった。
　2021 年度も、8 月の渡航は計画が立てられず、やむなく、9 月にフィンランドの研究者たちと第 1 回オンラインセッションを行い、2022 年 2 月には共同研究者が出版した著書『生殖する人間の哲学』のオンライン合評会を行い、3 月にはフィンランドの研究者たちと第 2 回オンラインセッションを行った。本共同研究は、フィンランド現地のネウボラでの職員・利用者などの当事者にインタヴューすることに基づいた研究として計画されたため、現地渡航ができない状況のなかで、その状況が改善されるのを待ちながら、不十分ながらできる範囲のことを実行した。
　2022 年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行のため海外渡航が困難となり、研究期間を１年間延長した最終年度となった。本年度も感染は断続的に続き、もはや海外調査を諦めざるを得ないかと危惧しながら、2023 年 3 月までのどこかで渡航できるようになることに最後の望みを賭けつつも、共同研究の比重を文献調査へと移し、論文集の刊行に力を入れることとした。2023 年 2 月にフィンランドの研究者たちと第３回オンラインセッションを行ったのち、2023 年 1 月を山とする第８波が 2 月になって収まってきたのを見て、急遽 3 月中旬に最後のチャンスと渡航を決め、当初複数で行く計画であったが、それぞれ諸般の事情から叶わず、結局、代表者・浜渦が一人でフィールド調査のため渡航することとなった。
　2023 年 4 月 28 日、研究期間終了後ではあるが、最後のフィールド調査研究の報告書も収録した論文集を大阪大学学術情報庫 OUKA(Osaka University Knowledge Archive)にオンラインで刊行することができた（https://hdl.handle.net/11094/91212）。本研究は、「国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))」によるもので、国際共同研究に比重を置いた計画を立てたものの、20 世紀初頭 1918～1920 年の通称「スペインかぜ」（正確には、「H1N1 亜型インフルエンザ」）以来、100 年に一度の世界的パンデミックがかつてと同様に 2020～2023 年と３年間続くなか、私たちの共

同研究も当初の計画通りには進まず、予定変更をせざるを得なかった。それでも、国内共同研究者とオンライン研究会を定期的に開催するだけでなく、海外の共同研究者ともオンライン・セッションを３回と最後の対面セッションにより共同研究を継続することができ、また、前述の論文集には海外共同研究者からの寄稿論文も含めて掲載することができ、小規模なものとはなったもののフィールド調査（訪問・インタヴュー）とその報告もすることができ、オンライン論文集を研究報告書として編むことができたことにより、とりあえずはこの国際共同研究が将来へ続くための足がかりとなるものを残すことができたと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 浜渦辰二	４．巻 27
２．論文標題 田辺元の「死の哲学」から現代日本の「死の哲学」へ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 田辺元記念哲学会編『求真』	６．最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Shinji Hamauzu	４．巻 8
２．論文標題 THE RECEPTION OF HUSSERL'S PHENOMENOLOGY IN JAPANESE PHILOSOPHY	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Japanese Philosophy	６．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浜渦辰二	４．巻 11
２．論文標題 医療におけるスピリチュアルケアの源流となった三人	５．発行年 2022年
３．雑誌名 グリーフケア	６．最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中真生	４．巻 47
２．論文標題 いのちとその産み育ての結びつきと分離―「母性」、出生前診断、「赤ちゃんポスト」などを手がかりに	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代と親鸞	６．最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中真生	４．巻 なし
２．論文標題 生殖技術と身体―身体はどのように被っているか	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ３STEPシリーズ 応用哲学	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 浜渦辰二	４．巻 20-1
２．論文標題 文系研究者からみた感染対策と認知症ケア	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本認知症ケア学会誌	６．最初と最後の頁 242-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 浜渦辰二	４．巻 18
２．論文標題 日本哲学史におけるフッサールの受容	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本哲学史研究	６．最初と最後の頁 151-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 浜渦辰二	４．巻 63
２．論文標題 死を取り巻く社会の変化（１）臓器移植法から脳死を考える	５．発行年 2020年
３．雑誌名 保健の科学	６．最初と最後の頁 81-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 浜渦辰二	4．巻 なし
2．論文標題 傷つきやすさの現象学にむけて　――フッサール現象学における萌芽――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 傷つきやすさの現象学	6．最初と最後の頁 9-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川崎唯史	4．巻 なし
2．論文標題 傷つきやすさと実効的自由　――メルロ=ポンティ的アプローチ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 傷つきやすさの現象学	6．最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中 真生	4．巻 なし
2．論文標題 生殖における「間接性」　――父親と養親の視点から――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 傷つきやすさの現象学	6．最初と最後の頁 39-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小手川正二郎	4．巻 なし
2．論文標題 子どもの傷つきやすさ　――親子関係の現象学的倫理学――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 傷つきやすさの現象学	6．最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中　真生	4．巻 31
2．論文標題 生むことから分離した「親」の形成――父親と養親の「間接性」を手がかりに	5．発行年 2020年
3．雑誌名 神戸大学文学部哲学懇話会紀要『愛知』	6．最初と最後の頁 74-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲原美苗、小西真理子、川崎唯史、中澤瞳	4．巻 35
2．論文標題 家族におけるケアと依存（男女共同参画・若手支援ワークショップ報告）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 現象学年報	6．最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中　真生	4．巻 31号
2．論文標題 産むことから分離した「親」の形成――父親や養親の「間接性」を手がかりに	5．発行年 2020年
3．雑誌名 神戸大学文学部哲学懇話会『愛知』	6．最初と最後の頁 －（印刷中）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計28件（うち招待講演　17件／うち国際学会　10件）

1．発表者名 浜渦辰二
2．発表標題 臨床哲学から スピリチュアルケアを考える
3．学会等名 上智大学グリーフケア研究所「修了生の会」主催講演会（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 コミュニケーションと共同意思決定のなかでの死の臨床
３．学会等名 第46回死の臨床研究会年次大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 生きがいの喪失と発見ーヴィクトール・フランクルと神谷美恵子ー
３．学会等名 上智大学グリーフケア研究所 実践・研究発表会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 中真生
２．発表標題 喪失の現象学？―失われたもうひとつのものー
３．学会等名 哲学会大会シンポジウム：現象学の新展開（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Mao Naka
２．発表標題 The Public and the Private in Childbirth and Childcare
３．学会等名 Second Online session on childcare phenomenology（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Shojiro Kotegawa
２．発表標題 Father and Son: Against Patriarchy
３．学会等名 Third Online session on child care phenomenology（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 池田喬
２．発表標題 現象学的倫理学と事実・価値の融合の問題：マードックからハイデガーへ
３．学会等名 哲学会第61回研究発表大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 川崎唯史
２．発表標題 メルロ=ポンティから現象学的倫理学へ
３．学会等名 関西倫理学会2022年度大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kawasaki Tadashi
２．発表標題 Punishing Frame: On Social Perception of Childcare in Japan
３．学会等名 Third Online session on child care phenomenology（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 コロナ禍での遠近法の変貌―ともによく生きるために
３．学会等名 台湾・日本オンラインフォーラム「私たちが生きる論理：パンデミックの時代における文化的差異」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 間主観性をめぐるフッサールとフロイト
３．学会等名 精神分析的心理療法フォーラムWS（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hamauzu Shinji
２．発表標題 The Role of Grandparents in Child Care
３．学会等名 First Online session on child care phenomenology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 厚労省ガイドラインとACP（人生会議）の理念を考える
３．学会等名 第三回在宅医療連合学会大会「エンドオブライフ期におけるリビングウィル、ACP（人生会議））の今後を考える（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 日本における認知症の百年
３．学会等名 第三回東アジア臨床哲学会議「医療哲学、カウンセリング、倫理学」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 死の人称性についてーフッサール現象学から考える現代医療の問題ー
３．学会等名 放送大学2021年度第７回公開講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ikeda Takashi
２．発表標題 Between undertaking work and taking responsibility for children. A discussion on "Why don't men become mothers?
３．学会等名 First Online session on child care phenomenology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中真生
２．発表標題 『生殖する人間の哲学』 のエッセンス
３．学会等名 『生殖する人間の哲学』 オンライン合評会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kawasaki Tadashi
２．発表標題 Reading Practice of Life in Helsinkiby Sara Park
３．学会等名 Second Online session on child care phenomenology（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Naka Mao
２．発表標題 The Public and the Private in Childbirth and Childcare
３．学会等名 Second Online session on child care phenomenology（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 中真生
２．発表標題 いのちとその産み育ての結びつきと分離――「母性」、出生前診断、「赤ちゃんポスト」などを手がかりに
３．学会等名 親鸞仏教センター主催シンポジウム：＜いのち＞という語りを問い直す（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 日本哲学史展開期におけるフッサール現象学の受容
３．学会等名 共同研究会 「東アジアにおける哲学の生成と発展―間文化の視点から」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 板井孝壱郎，西川満則，満岡聰，浜渦辰二
２．発表標題 Withコロナ時代のリビングウイル、ACP（人生会議）を考えるーごく当たり前の意思表示を目指してー
３．学会等名 日本生命倫理学会第32回年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 浜渦辰二，竹之内裕文，是永かな子，石原孝二
２．発表標題 北欧のケアと生命倫理
３．学会等名 日本生命倫理学会第32回年次大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 コロナ禍での遠近法の変貌―ともによく生きるために
３．学会等名 Theあしかが学15（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 浜渦辰二
２．発表標題 スピリチュアルケアの 臨床哲学
３．学会等名 臨床スピリチュアルケア協会第94回研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中　真生
２．発表標題 「生むこと」あるいは「生まれること」における個別性と普遍性
３．学会等名 日本アーレント研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 川崎唯史
２．発表標題 文学作品を用いた現象学的倫理学の可能性
３．学会等名 日本現象学会第41回研究大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中　真生
２．発表標題 産むことから分離した「親」の形成――父親や養親の「間接性」を手がかりに
３．学会等名 哲学会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計10件

１．著者名 レヴィナス協会（編）、川崎唯史・中真生ほか著	４．発行年 2022年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 352
３．書名 レヴィナス読本	

１．著者名 浜渦辰二・Irina Poleshchuk・Valerie Oved Giovanini・中真生・小手川正二郎・池田 喬・川崎唯史	４．発行年 2023年
２．出版社 大阪大学学術情報庫	５．総ページ数 117
３．書名 子育ての現象学	

１．著者名 廖欽彬・伊東貴之・河合一樹・山村奨（編著)、浜渦辰二ほか著	４．発行年 2022年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 853
３．書名 東アジアにおける哲学の生成と発展	

１．著者名 杉村靖彦・渡名喜 庸哲・長坂真澄（編著）、小手川正二郎ほか著	４．発行年 2022年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 422
３．書名 個と普遍――レヴィナス哲学の新たな広がり	

１．著者名 中　真生	４．発行年 2022年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 320
３．書名 生殖する人間の哲学―「母性」と血縁を問い直す	

1．著者名 稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（以上編者）、佐藤愛、山本千晶、池田喬、フィリプ・ヒューズ、藤高和輝、小手川正二郎	4．発行年 2020年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 208
3．書名 フェミニスト現象学入門	

1．著者名 中岡成文（監修）、寺田俊郎（編著）、小川泰治、中川雅道、藤本啓子、掘越耀介、渡邊美千代、今井祐里、田代伶奈、鈴木径一郎、辻明典、川崎唯史、永井玲衣、古賀裕也、掘静香	4．発行年 2021年
2．出版社 大阪大学出版会	5．総ページ数 336
3．書名 哲学対話と教育	

1．著者名 Tsuyoshi Matsuda, Jonathan Wolf, Jun Otsuka, Tetsuya Ishii, Ping Yang and Xin Kang, Kengo Itamochi, Naoto Chatani, Mao Naka, Takashi Yanagawa, Kenji Takeuchi and Mai Miyamoto, N. Hoshi, Atsushi Fujiki, Ken Kawamura, Daisuke Yoshinaga, Shishin Kawamoto, Mikihito Tanaka and Ryuma Shineha, Togo Tsukahara	4．発行年 2020年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 312
3．書名 Kobe University Social Science, Risk and Regulation of New Technology	

1．著者名 小手川正二郎	4．発行年 2020年
2．出版社 トランスビュー	5．総ページ数 278
3．書名 現実を解きほぐすための哲学	

１．著者名 宮園健吾・大谷弘・乗立雄輝編、中真生（分担執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 武蔵野大学出版会	５．総ページ数 396
３．書名 因果・動物・所有　一ノ瀬哲学をめぐる対話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中　真生 (Naka Mao) (00401159)	神戸大学・人文学研究科・教授 (14501)	
研究分担者	小手川　正二郎 (Kotegawa Shojiro) (30728142)	國學院大學・文学部・准教授 (32614)	
研究分担者	池田　喬 (Takashi Ikeda) (70588839)	明治大学・文学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	川崎　唯史 (Tadashi Kawasaki) (90814731)	東北大学・大学病院・特任講師 (11301)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ポルシェチュック　イリーナ (Poleshchuk Irina)	University of Helsinki・researcher	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ジョヴァンニーニ　ヴァレリー・オーヴド (Giovanini Valerie Oved)	California State University・lecturer	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計4件

国際研究集会 1st Online session "Phenomenology of Child Care"	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 2nd Online session "Phenomenology of Child Care"	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 3rd Online session "Phenomenology of Child Care"	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 4th On-site session "Phenomenology of Child Care"	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フィンランド	University of Helsinki			
米国	California State University			